

---

# 昨日見た夢

清水澄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昨日見た夢

### 【Nコード】

N4408BA

### 【作者名】

清水澄

### 【あらすじ】

12歳年下のいとこに高校生のときに恋して・・・大人になるのを待って手に入れたのはいいけれど・・・なかなか思うようには世の中ならないようです。

前半はラブラブじれじれちよとエッチ(?)

後半は・・・・・・・・。

## その1（前書き）

## その1

昨日見た夢どんな夢？

大好きな人に愛されてる幸せな夢。

ずっとずっと、永遠にこんな日が続くと思っていた・・・。

「・・・・・・・・んっ・・優ちゃんやだ・・・。」

逃げようとする彼女の後頭部を片手で押えた。彼女が声を出して口が開いた隙にますます口付けを深めた。美香がほうけたような、でも怯えた目をして僕を見つめる。でも僕はそんな彼女の顔と声に煽られてますますキスを深めた。

深まるキスに、目を強く瞑り、握り締めている両手のひらのこぶしで僕の胸を押して必死に抵抗してくる。

そんな彼女の行動を無視して彼女のシャツの隙間から手をいれて下着をずらす。

そして、その手で柔らかい胸を包み込む・・・。

「・・・・・・・・ん！！やだっ！！」

悲鳴のような声にひるむ、胸を叩かれてわれに戻る。しまった、やりすぎた……。気まずい思いで彼女の顔を覗き込むと、思い切り睨まれる。

「・・・・・・・・ごめん、やりすぎた。おこちゃまの美香にはまだ早かつ

たよね。」

口では謝りながら、でもあまり反省していない。そんな僕の気持ち  
が分かったのか見る見る間に彼女の目に涙が浮かぶ。

「ああ……。ほんとにごめん、お願いだから泣かないで？反省して  
る、もうしないから……。」

説得力ないかな？この間も久しぶりに会う彼女のやわらかさに我慢  
が出来ずに同じことをして泣かしてしまった。

彼女の責め口調の心の声が聞こえる。ごまかしてなだめないと明日  
の貴重な休みを彼女なしで過ごす羽目になる。

今度はやさしく抱きしめて髪をなでながらほほに口ずけてみた。今  
まで必死に抵抗していたのが嘘のように、じつとされるがままにし  
ている……。

「……。はあ、いつまで辛抱しないとイケないのかな？」

思わずため息とともに本音がこぼれる。うわあっ、しまった、彼女  
の怒った大きな声が部屋に響き渡る。

「優ちゃんの スケベ！！エッチ！！根性なし！！」

思わず叫んだ彼女の口をふさぎ、しー・下に聞こえる、親父が来  
ると苦笑いをする。

「根性なしはないと思うな……。僕的にはあると思うよ？ だつて  
婚約までしてる好きな子にいつ手を出してもいいと思うのに、その  
子の気持ちを優先して16年も最後までせずに辛抱してるんだから  
ね。」

最後つて何？16年て何、私の年じゃん！！じゃあ何優ちゃんは私が生まれたときから私とすることしか考えてないの？と、突っ込まれた。

また涙目で見つめられた。その顔を見ながら生まれたときからは言い過ぎだけでも、それに近いものはあるって自信を持っていえるよ……。つてにやりと笑っていつてやった。

「すけべ！！！！ばか！！もう知らない！！もう帰る！！！！」  
再び大きな声を出し立ち上がるうとした彼女の手をつかみ、自分のほうに引き寄せ胸に抱きしめ、そして耳元でささやいた。

「……きらいになった？」

美香を抱きしめる手に力が入る。

「……悔しいけれど、ならない……。」

僕の腕の中で胸に顔をうずめて美香が答えた。

「美香のバージンは僕のものだよ……。ね？」

抱きしめて頬に唇を寄せながらささやいた。

だからそんなこといわないで！！……と、僕の腕からすり抜けて、ドアのほうに逃げながら、きつと睨んだ彼女の顔を見て、ごめんごめん反省してます……。と、でもまた笑ってしまった……。

！！！！！！絶対してないと思う！！！！！！睨みつけながらこちらを見ている。美香……。心声ただ漏れだし……。

いつもは、仕事の都合上職場から5分のところにアパートを借りて住んでいるのでこの家にはいない。

今日と明日休みが取れたので今日午前中職場に顔を出して久しぶりに実家に帰って来た。疲れていたのも、自室のベッドでうとうとしていたら隣に住んでいる幼馴染兼婚約者が部屋に入ってくるのに気がついた。

疲れてるなら帰るよと言った彼女の言葉に、でも美香を充電したいからと引き寄せる・・・そして、現在に至る・・・。

睨みつける彼女を見ると、しまった迂闊に部屋に入らなければよかった、最近いつもこのパターンで後悔している・・・という、彼女の心の声が聞こえてくるようだった。

ほんと、面白いほど考えていることが分かる。

「こんなことばかりするんだったら、もう帰るねっ!!」

くるりときびすを返し出で行こうとしている彼女に、少し意地悪をしたくなり言っちゃった。

「美香は、もう少し男の生理ってものを理解しないといけないな。」

「・・・・・・?」

セイリ・・・?そんなもん、男の人にあるんだろうか?・・・と、怪訝な顔をしている彼女に笑いながら説明を加える。

「女性のじゃないよ、疲れたときに男は、種族保存の本能が働くってこと。わかった?」

・・・・・・シュゾクホゾンノホンノウ・・・・?

言葉の意味を反芻し、頭の中でゆっくりと浸透させている、そんな彼女の表情を観察していた・・・面白いやつぱり見ていて飽きない。

わかりかねてる彼女に追い討ちをかけるように言っちゃった。

「種族を残すための行動を、したくなる・・・ってことだよ？」

につこり微笑んで言った僕の台詞に、真っ赤になって口ごもっている彼女の顔を見ていた。

「・・・っ！！それって！！！」

思わず笑って美香と目をあわす。

「そんな、本능が働いてるときに好きなこの顔を見たら、どんな聖人君子でも我慢できないよな？」

もういい！！一言叫んで、そばにあったクッションを思い切り僕の顔に投げつけ、彼女は出て行った。

怒って帰った美香の後姿を2階の自室の窓から見下ろしながら声をかける。

「美香！明日休みを取ったんだ。今日のお詫びにデートしようか？」

ふくれっつらを隠さずに、それでも立ち止まりこちらを振り向く彼女を見ていた。

「美香が勉強できるように、お手本になるラブラブのラブストーリーを見に行こう。それともホテルがいい？」

僕の顔を睨みつけながら美香が叫んでいた。

「アクションホラーじゃないと行かない！！ホテルは無しっ！！！」

ー

分かった、9時に迎えに行く、今日はごめんね、と声を返す。振り返りもせず、怒りながら隣の家に帰っていく美香の後姿を見えなくなるまで見送った。

## その1（後書き）

前作お気に入り登録してくださった方、ありがとうございました。  
そして、今この話に目を通して下さってる方、ありがとうございます。  
す。

拙い作品ですが最後までがんばりますので、よろしく願ひいた  
します。

清水澄 拝

## その2

気まずさをごまかすためにからかいすぎたと、反省する。

体の中が熱くなつたせいですっかりと目が覚めた。空腹を感じお腹に入れるものは無いかと1階に下りると、父親がいた。

「・・・おまえな、美香ちゃんは私のかわいい姪で、まだ高校生なんだから学校に通えなくなる事態にだけはするなよ。」

いいにくそうに、新聞に目を落としながら言う。・・・新聞さかさまだし、それで読めるのか？・・・器用な人だ・・・。

「それはどういう意味？」

分かっていることを、あえて聞いてみる。

「お前は、27で社会的地位もあり、今すぐ結婚しても問題ないだろう。でも、美香ちゃんはまだ15で高校生だ。いくら約束が出来ているとはいえ、せめて学校は卒業させてあげないとな。」

「・・・だから具体的には、何がしたいの？」

「・・・避妊はしろよ。」

最後には、小さい声でつぶやくように言った。

そばに近づき、さかさまの新聞を直しながら、答えた。

「おれは、医師、その手の知識は申し訳ないけれど父さんよりあると思うよ？それに・・・。」

「・・・それに？」

いいにくそうにしている、僕の顔を新聞から目を離しの僕を見た父と視線が合った。思わず目をそらす。

「子供が出来る事実にいたってないし・・・。」

「未だしてないの？何やってるの！！？」

後ろからハモツて聞こえる声に思わず振り向く。うわっヤバイ！叔母（美香の母親）と、わが母親、僕が一番苦手とする人たちだ。

「・・・ホテル代あげようか？」

叔母が、ありがたい申し出をしてくれる。逃げたい・・・。

「……持つてるから良いです。それにそんな問題でないですから。」

申し出を謹んでお断りする……。と。ホントわが娘ながらびびりよね。いい加減あきらめれば良いのに、ごめんね、つらいでしょう我慢させるわね。と追い討ちをかけられた。いたたまれなくなつて、疲れているので失礼しますと自室へ退散する。

その後ろから、母と、叔母の、もうちょっとだったのにね惜しかったわね、ファイト!! 明日は決めてね!!!……と言う声がかかった……。へやで事に及ぼうとするのは二度と止めよう……。と、心に誓った。

翌日、朝食をとっていると、新聞を取ってきた父親に声をかけられた。

「お前美香ちゃんに、何時って約束したんだ？」

その声に時計を見る、昨日早く寝たので思ったより早くに目が覚めた。まだ、7時だ。

「9時に迎えに行くって言ってるけれど？」

僕の声に怪訝そうに、父が言った。

「さつき、美香ちゃんが可愛いかつこうして、こつちを覗いていたんだ。僕の顔を見て、逃げて行った。」

何時から起きてんだ？あいつは？

「呼びに行つて、一緒に食事するか？」

いや、良いもう出かけるから……。お母さんごめん、食事もういらないと声をかけて……。上着を抱えて家を飛び出した。

美香の家の門柱の影に隠れてそつと中を覗いた。中から美香が、ゆつくりと顔をだし我が家のほうを覗いてる。本当だ、白地にオレンジの花柄の可愛いワンピース。音を立てずにこっそり近ずき後ろから抱きしめる。

「・・・・・・・・!!」

「おはよう?」

声も立てられず驚く美香の頭のとっぺんにそつと口ずけを落とす。

「何で分かったの?」

上目ずかいにこちらを見る。美香のことなら何でも分かるよ。一番好きな人も知っている・・・・と笑って答えると、抱きついてきて、それは誰?ときいてきた。

「もちろん、僕でしょう?」

と答えると、うん、そうだよ。と首に手を回しながら僕の胸に顔をうずめてくる。これで、キス以上のことをしようとすると、怒るのだからたちが悪い。

「我慢できなくなるからやめて・・・」

というと、きょんとした顔をした後真っ赤になった。可愛い。

「朝ごはん食べたの?」という問いかけに、未だと答えたので。モーニングどこかで食べながら、見る映画を決めようかという提案にまた抱きついてきて大好きといっているのが聞こえた。本当に今日僕は我慢できるのだろうか?

電車に乗り中心地に出る、朝ごはんを食べながら、映画のチェックをした。美香はぐずぐず言ったがじゃんけんで僕が勝ち、恋愛ものの邦画を見ることになった。

「この時間だったら、時間があるね、どこかぶらぶらしようか?何か欲しいものがあつたら買ってあげるよ?」

美香にそう伝えたが、優ちゃんがそばにいてくれたらそれでいい・・・と可愛いことを言う。プロポーズしたときに買ってあげた指輪が小さくなつてはいるからとチェーンで首にぶら下げているのが目に留まる。

「指輪、買いに行こうか?」

ええ〜いいよ・・・でも欲しいかな？・・・とぶつぶつ言っているのが聞こえる。

「美香はあのころ成長期だったから、はいらなくなっただよね。ほんと、今こうして横に並んでいるけれど、親に認められてなかったら僕は犯罪者だね。」

笑いながら言ったら、きょとした顔をして、何で？という。笑いながら、美香の耳に顔を近づけて青少年淫行罪って知ってる？16歳未満に手を出すと、青少年保護条例に引っかかるんだ、美香はぎりぎりアウトなんだよ？美香に訴えられたら僕は刑務所に行かないといけない。・・・といったら、じゃあ、エッチな事しななければ良いじゃない！！と膨れらた。

指輪を買うために、宝飾店に向かう。ペアリングを見た後、僕は、婚約指輪の代わりになりそうな指輪を物色した。

美香の誕生石のダイヤがサファイアを囲んで、一列に並んでいる指輪が目止まる。今日のみかの服装にもよく似合う。ペアリングで満足している美香を引き寄せて、その指輪を指した。

「可愛い！！」

美香が思わず身を乗り出した、店員がすかさずお出しいたしましたよとか？と言う。僕はお願ひしますと伝えて、出された指輪を美香の左手にはめた。

「わ〜かわいい！！」

・・・最初は喜んでいたが、急にはずそうとしている。どうしたんだろう？

「気に入らない？」

僕の服のすそをつかんで首を横に振って、小さな声でささやいた。

「・・・値段・・・。」

思わず値札を見る。・・・う〜ん。

「・・・僕のお給料知ってる？未来の奥さん？」

美香は怪訝な顔をしながら、まだささやく。でも高いよびっくりする値段だよ？・・・と

「これ婚約指輪のつもりだから・・・まだまだ、1か月分にも足りないよ？」

目を丸くしてこちらを見る。その後小さな声で、でもこんなに高いの怖くてはめられない・・・と。

店員がふとこちらのやり取りに気づいてか、実はおそろいでネックレスとピアスがあるんです。といったきた。いい機会なので見せてもらう。同じ石が並んだシンプルなもので、美香によく似合いそうだ。

「全部で、おいくらになりますか？」

店員の伝えてくれた値段にうなずく、予算内だ。

「いただけますか？刻印はいれられますか？」

もちろん大丈夫です。と言う店員との会話に、美香がぶんぶん首を振っていた。

美香を振り返り宣言する。

「婚約指輪の代わりです。三つあわせた値段の指輪を一つ買うのと、この3点を受け取るのとどっちがいいの？」

「・・・こっち・・・。」

ペアリングは今ほめます刻印は後日お願いできますか？ 石のついたほうは刻印後連絡いただけるかとあります。と店員に伝える。横で聞いていた美香は、僕の袖をひっぱって小さな声で・・・ありがとうといった。

どういたしまして、と答えた後、でも感謝の気持ちは、態度で示して欲しいな？と言ってみたら、怪訝な顔をして、どうしたら良いのと聞いてくる。

たとえば、キスしてくれるとか、抱きついてくれるとか？とまじめな顔をして言うと、真っ赤な顔をして、あとで、誰もいないところで・・・。とささやかれた。・・・本当に僕は今日我慢できるんだろうか？

### その3

店を出て、映画館を目指して、二人で手をつないで歩いていると声をかけられた。

「あれ？中野先生？」

声のほうに目をやると職場の看護婦さんがいた。

「奇遇ですね、今日はお休みなんですか？めずらしい。」

「うんデートなんだ。」

と答えると、美香のほうを見て少しびつくりしたように返された。

「え？妹さん・・・ではないんですか？」

「ちがうよ、恋人、婚約中だよ。美香、御挨拶して。」

はじめまして、橘 美香です、と返事をする。

それぞれに自己紹介をされて、また美香がぺこりと頭を下げる。

「・・・えつと、彼女さん童顔なんですね？びつくりしました、高校生ぐらいにしか見えないので・・・。」

「高校生だよ？」

平然と答える僕にええ〜と声が上がる。

「・・・おいつつですか？」

恐る恐るされただろっ質問に、僕に促されてもうすぐ16歳になりますと美香が答える。

「先生、冗談が過ぎますよ？嘘でしょう？」と言われ、証拠見せようか？といいながら美香を引き寄せて口づけると美香が怒った。

「優ちゃんやめて！！」美香はあわてて僕から離れようとする。

僕は、啞然としている二人を横目で見ながら、もう一度美香を抱き寄せた。

「こんな公衆の面前で！！しかも今胸触ったでしょう！！」

「え〜でも服の上から・・・だよ？」

僕が笑いながら答えると、美香はますます怒った。

「油断すると、服の中に入ってくるからいやなんです！！」

大きな声で、僕の言葉に反論した後、美香は二人の啞然とした顔を見て真っ赤になって、うつむく。

そして、ごめんごめんもうしないと笑ってる僕の顔を横目で睨みつけながら、小さくもう知らないといつぶやいた。

呆然としている二人に、ごめん映画の時間だからと伝えてその場を後にした。

つないだ手を引き寄せて美香の腰にてを回すと、美香は僕のシャツの後ろをつかんで引き寄せた。

「・・・・・・・・ええ！！！！・・・信じられない・・・・・・・・。イメージが崩れた、なにあのでれでれ！？しかも、王子ロリコンだったんだ・・・・・・・・」

二人の声が、聞こえたが無視した。自覚はあるからほっといてください。

ラブラブの映画を選択したつもりが、恋人をおいて彼氏に死なれる悲恋だった。

しまった選択を誤った・・・と思ったときには遅く・・・主人公に感情移入して美香は泣き止むことが出来ない。

ため息をつく僕を見て美香が言う。

「でも、優ちゃんが死んじゃったらと思うと、止まんない。」

「不吉なこというなよ、僕が美香おいて死ねるわけないだろう？心配でおちおち死んでられないよ。それに、・・・いい加減にしないと、目が溶けて、不細工になるよ？」

もうなってます。・・・という、美香のつぶやきに笑いながら同意すると、平手が飛んできた。

なきやんだかわりにすねる美香と遅めの昼ごはんを食べて、美香の初夏のワンピースを選んだと、母親からメールが入った・・・・非常にいやな予感がする。

「優ちゃん？どうしたの？」

画面を睨みつけて、ため息をついている僕を美香が怪訝そうな顔で覗き込む。

「先の宝石店に戻ろう。」

ジュエリーショップで先ほどの刻印に要する時間を聞くと今から6時間ほどでできるという。

ペアリングも刻印を頼み後で取りに来る旨伝えて店を出た。

「優ちゃん？ここ9時なんかに出たら門限間に合わなくなるよ？

おじさんが怒るよ？」

親父は、美香を実の親以上に大事にしている。

血のつながっている僕も美香に近づく悪い害虫と思ってるふしがある。

僕は黙って先ほど来たメールを見せた。無言でメールを読んだ美香が真っ赤になった。

僕は美香に聞いた。

「・・・家のかぎ持つてる？」

美香が首を振る・・・。

「覚悟を決めようか？何処に泊まりたい？」

真っ赤になってうつ向いたまま返事がない。僕は携帯を操って、この辺で有名なホテルの予約を入れた。

彼女は僕の服のすそを引っ張って小さくつぶやいた。

「家には入れないの？」

「僕も鍵は持っていない。家においてきた。」

それ駄目じゃん！！自分のことは棚に上げて美香は怒った。

「おかーさんたちひどい！！」美香はメールの文字を見ながら涙目になっている。

メールには、

”今日はお隣とダブルデートでお泊りです。帰りません。優希君  
美香をよろしく願います。

悲願達成がンばれ！！”

とかいてある。

美香は、どうしようひどい、お母さんお父さんひどい・・目に涙を  
ためながら繰り返していた。

僕は美香のそんな態度に溜息が出た。そして、思わず言ってしまった。

「泣くほどのこと？美香はそんなに僕のことを嫌いなんだ？」

真っ赤になって、僕の顔を見て、そして下を向いて、違うもん・・  
と、つぶやく。

でも泣いてるじゃないか、かなしいなあ・・・というと、ゴメンナ  
サイと謝ってくる。

「言葉だけじゃあね？たいどもほしいな？」

とにつこり微笑む僕に小さな声で、ここで？と上目遣いに聞いてく  
る。

もちろん、と微笑む僕に、左右をちらちら見ながら、覚悟を決め  
て僕の服の襟をつかんで自分のほうに引っ張って、そっと口付けて  
くれた。

「上出来♪ だいぶおこちゃまから成長してくれたかな？」

「優ちゃんは年々意地悪で、スケベになってくる」

「美香かやらせてくれたら、欲求不満が解消されて、むつつりの部  
分は薄くなると思うけれど・・・？」

と笑うと、美香は返事もせずに、僕の苦手とする隣のファンシーシ  
ョップにはいった。

可愛い嫌がらせに動じずショップの前で待つことにした。中のみ

かはこちらをちらちら見ながら、店内をうろろしている。そんな美香を観察しつつ、逆ナンの誘いを断る。ペアリングをはずさなければ良かったと思う。

暫くして小さな紙袋を持って美香が出てきた。

「何買ったの？」

「携帯用の、乳液と化粧水と石鹸」

何処で使うの？と言わずもがなの質問をすると、だって、泊まるんでしょう？とすねたように答える。

「・・・いや、多分ホテルのアメニティであるし・・・それよりも、着替えと下着でしょう？」

僕が苦笑しながら、突っ込むと、ますます膨れる美香がいた。

自分で出すと言う美香を説得して誕生日には逢えないから・・・と。ワンピースとボレロを購入した、下着売り場には連れて行ってもらえなかった。プレゼントしたかったのに・・・、というと平手が飛んできた。

僕の着替えのシャツも美香に選んでもらい買い物で済んで二人で今日泊まる予定のホテルに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4408ba/>

---

昨日見た夢

2012年1月13日20時53分発行